

冬の交通を支えていた

馬そり

今は自動車が忙しく行き交う都心ですが、馬そりがゆっくりと往来していた時代もありました。札幌で発達したこの馬そりを紹介します。

明治十一年（一八七八年）、開拓長官の黒田清隆くろだきよたかは、ロシアを視察して馬そりの便利さを知りました。そこで、ロシアの職工三人を札幌に招き、北海道で初めての馬そり造りを行わせました。こうして馬そりは翌年の冬には札幌—小樽間の本格的な輸送事業に使われるようになったのです。

一九年（一八八六年）に官営工場が廃止されると、馬そりの技術を習得していた職工たちが札幌で独立し、開業し始めました。彼らが造ったのは、ロシア型を改良した札幌型馬そり。ナラ材の台木（二本の接合部分）にハルニレなどの柴木しばき（若木の細丸太）を巻いて組み立てたことから「柴巻馬そり」と呼ばれました。

冬の交通や輸送のほか除雪にも活躍した馬そり

は、大正十三年に市内で年間三千台も生産されていきます。

昭和三十三年、商店街の



大通公園の雪捨て場（昭和32年）
—札幌市教育委員会文化資料室所蔵—

除雪を進めるため、大通西六丁目目に雪捨て場が設けられたことがあります。一般の商店は、馬そりを使ってここに雪を運びました。ところが、この雪捨て場は、春に雪が溶けるとごみや馬ふんが現れるという見苦しい光景になったためひと冬で中止となってしまいました。

冬の生活を支えてきた馬そりですが、昭和三十年代になると自動車の普及とともに急速に姿を消していきました。